

平成21年 4月30日現在

研究種目：若手研究(B)  
研究期間：2007～2008  
課題番号：19700561  
研究課題名（和文） 高齢者の健やかな生活を支えるモノとの浸透関係に関する研究  
研究課題名（英文） Research on transactional relationships with person and objects for supporting the elderly' s healthy life.

## 研究代表者

松本 光太郎(Kotaro Matsumoto )  
名古屋大学・エコトピア科学研究所・特任講師  
研究者番号：60420361

## 研究成果の概要：

本研究では、高齢者の健やかな生活を支えるモノとの相互浸透関係について明らかにすることを目的とした。当研究期間において、在宅高齢者および施設居住高齢者の生活における人工物、植物について検討を行った。それらのモノは高齢者の生活に入り込み、改めて意識化・対象化できない浸透関係にあった。その浸透関係は高齢者が健やかな生活を支えるにあたってどのようなべきか。その点を考察するために、高齢者の具体的な日常行動の検討を通して浸透関係の質的差異について提示した。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
総計	1,600,000	180,000	1,780,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：高齢者、健やかな生活、モノ、相互浸透関係、人工物、植物

## 1.研究開始当初の背景

これまで高齢者の健やかな生活を理解する上で、人と人との関係、例えばソーシャルサポートに関する研究が盛んに行われてきた。人が社会的生活をおくるにあたって人との関係性は不可欠である。一方で、申請者は高

齢者の外出に関する自由記述アンケートを行った結果、外出時に高齢者は人とそれほど会っていないことを指摘し、むしろ「淡いかかわり」と名づけた外出時に取り巻く環境・モノとのささやかなかかわりが存在することを明らかにした(松本, 2004)。  
G.H.Mead(1934)が指摘したように、人は、物

理的な他者(ヒト)だけと相互作用するのではなく、シンボルと相互作用することにそのオリジナリティがある。例えば、お金や最近子ども間で流行のカードゲーム(デジモン)を例に挙げることができるだろう。

Csikszentmihalyi&Halton(1981)は、「Cherish[ed] Objects(大切な/だったもの)」という概念を用いて、身の回りのモノがシンボルとしてその人の自己を表していることを指摘した。その他にも、Rubinstein(1987、2005)やRubinstein&Parmelee(1992)においては、高齢期においてモノを所有することの意味を、具体的な「Possessions(所有物)」を挙げてもらい、個々のモノについて語ってもらうなかで探索している。

モノにより高齢者の生活が保たれ、世界が開けていく様子を描き出している研究がある。南(2001)は、ある高齢の女性が都市再開発にからんで長年住んできた家から新たな家に移行した後も、長年なじんだものや道具に囲まれた「生活空間」が変わらず保たれていた様子を描きながら、その変わらなさについて思索している。また浜田(2002)においては、介護用具を選択・紹介する実践を通して、一度閉ざされた高齢者の体験世界(例えば、お風呂に入る、買物をする)が道具の介在によって再発見される様子が示されている。申請者は、高齢者の外出に同行する調査を通して、外出時に環境(モノ)と<今・ここ>で出会う背景について検討した。その上で、モノに出会うことが高齢者の生活において不可欠である理由として、我々は日々いろいろなモノに出会い、その出会いの多くをいつの間にか忘却している、そのような出会いと忘却のサイクルを連続させることが「私」を保ち継続させることに繋がるという仮説を提示した(松本、2005b)。

また、金森(2006)は、「心」というものを人の内部に閉じ込めるのではなく、取り巻く環境の中に散りばめられた存在として「霧心」

という言葉を提案した。この「心」理解は、人と取り巻くモノとの関係を、人とモノに切り離し互いに作用しあう「相互作用(Inter-action)」として捉えるのではなく、互いに浸透し合い分離出来ない関係として捉えていく「相互浸透(Trans-action)」への転換を示唆するものであろう。この「相互浸透」という考え方を提唱した Ittelson(1970)によると、我々が通常「環境」と言っているのは手に取ったり操作したりといった相互に作用しあう“Environmental Objects(環境物)”のことであり、“Environment(環境)”とは我々を常に取り囲み、我々と相互浸透な関係にある。昨今、認知症高齢者において「モノ盗られ妄想」はよく見られる症状である。その原因を脳の損傷だけに帰属させるのではなく、当たり前に取り巻いていた環境・モノから引き剥がされたことから発生メカニズムを考えることは有用であろう。実際に、佐々木・羽生・長島(2004)は、施設居住の高齢者が「その場所をどれだけ自分のものになっているのか」ということを理解する上での表象として、どれだけのモノを持ち込んでいるのか明らかにしようと試みている。また、橘ら(1997、1999)は施設居住の高齢者が居室にあるモノをどのように使用しているのかについてもリストアップしている。橘らの視点は、モノだけをリストアップする「相互作用」的なものではなく、モノと人との界面である「使用(行為)」を捉えていることから「相互浸透」的な視点の萌芽を感じさせるものである。しかしながら、橘らはモノの使用(行為)をリストアップするにとどまり、その行為の質感については描き出せていない。モノと高齢者の相互浸透関係を理解する上で重要なのは、むしろモノとの関係を語ったり使用したりするなかで、それまでの軌跡やそのモノを通した彼/彼女の生活世界を描き出すことである。

以上から、モノは物理的意味だけでなく、シンボルとして意味を持つ。シンボルとして

のモノに支えられ、世界が開けていくことが高齢者の生活のなかで起こっている。そのような関係を従来は相互作用という視点から検討してきた。しかし、モノにおける「人を取り巻いている」という特性から、人とモノを切り離す相互作用ではなく、人とモノを相互浸透関係としてとらえることが妥当である。高齢期に安定的で健やかな生活をおくるにあたって求められる高齢者とモノにおける相互浸透関係のあり方を、具体的な高齢者の生活への参与観察において記述を行なうと同時に実証することは学術的貢献が大きいと判断した。

## 2. 研究の目的

モノと高齢者の切り離せない関係について実証するために、以下の3点を明らかにする。

① 高齢者の生活において参与観察を行うことにより、どのようなモノを大切に、どのようなモノを当たり前で使用しているのか、その様相を描き出していく。

② ①の描き出しをもとに、モノが高齢者の生活をどのように支えているのか、そのあり方について検討を行う。

③ モノと高齢者との関係が相互浸透関係にあり、高齢者が生活していくに際して不可欠な関係性であることを実証していく。

## 3. 研究の方法

在宅高齢者とモノに関する記述：

在宅高齢者の自宅を訪れるなかで、自宅の中に当たり前にあるモノの使用(行為)に関して観察を行なう。高齢者の生活すべてを観察することは出来ないし、観察する時間も限られている。それでも、モノを使用する行為が物語る「その人が営んできた生活」をうかがい知る上で重要であるように思われる。

施設居住高齢者とモノに関する記述：

施設内外にて一緒に過ごすなかで、出現する行為からどのようなモノと日常出会う

ているのか観察し記述していく。このフィールドワークでは、彼/彼女が施設内外にて何かしらのモノについて語りだすことやそのモノを使用する行為が出現するのを待つことが重要である。

## 4. 研究成果

本研究を通して得た研究成果は、モノと高齢者の相互浸透関係における質的差異を示した点である。

具体的には、施設において高齢者を取り巻いているモノは、私物だけでなく、施設・公共のモノが多数ある。一方で、自宅において取り巻いているモノはほぼすべて私物である。

そして施設においては、モノが入居者同士でやりとりされることが頻繁に見られ、モノは専有するものではなく、贈与されるあり方も確認できた。一方で、専有することが難しい施設だからこそ、モノに固執する場合もあった。

さらに、自宅および施設から外出した際には、外出前と後では、取り巻いていたモノとの関係のあり方が変容することを明らかにした。

このように人とモノの相互浸透関係のあり方を記述することによって、これまで検討されなかったモノの世界を明らかにする土壌はできた。しかしながら、高齢者の健やかな生活を支えるモノとの相互浸透関係とは、どのようなあり方なのか、その点については検討が及んでいない。その点が今後の課題として残った。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

①松本光太郎 高齢者に提供する手前で考えること：ロボットのエシックスに向けて. ヒューマンインターフェイス学会誌 Vol.10(2) P5-8. 2008. 査読無.

②K. Matsumoto, & G. Obinata. Toward a Desirable Relationship of Artificial Objects and the Elderly: From Standpoint Dialogue of Engineer and Psychologist. Pervasive Computing for Quality of Life Enhancement, Proceedings of 5th International Conference on Smart Homes and Health Telematics. Springer-verlag. P 1-8. 2007. 査読有.

〔学会発表〕(計 6 件)

①松本光太郎 環境と浸透しているときこそ確かな主体でいられること：有機－発達論的アプローチを伏線にして 日本発達心理学会第20回大会 2009年3月23日 日本女子大学

②松本光太郎 高齢期における発達のシンボルとしての植物の成長 日本質的心理学会第5回大会 2008年11月30日 筑波大学

③K. Matsumoto. Discussion on Environmental Experience of the Elderly's Outings: From Accompanied Observation. EDRA(39th The Environmental Design Research Association annual meeting). May 29, 2008. Mexico:Universidad Veracruzana.

④K. Matsumoto, & G. Obinata. Toward a Desirable Relationship of Artificial Objects and the Elderly: From Standpoint Dialogue of Engineer and Psychologist. ICOST2007(5th International Conference On Smart homes and health Telematics).June 21, 2007. JAPAN:Nara.

⑤K. Matsumoto. A Consideration of the Transactional Relationship between the Elderly and Objects: Focus on How the Adhesive Name Labeler "Tepra" is Shared and Remains in a Welfare Institution. ISET07 (2nd International Symposium of EcoTopia Science). Nov 25, 2007. JAPAN:Nagoya.

⑥松本光太郎 外出することの意味：高齢者の生活世界への探究 日本心理学会第71回大会 2007年9月19日 東洋大学

〔図書〕(計 2 件)

松本光太郎 書評：「排泄ケアが暮らしを変える」(浜田きよ子著、ミネルヴァ書房) 『地域リハビリテーション』(三輪書店) Vol.3 No.5 P419 2008年

松本光太郎 外へ出て家に帰ること：高齢期

の日々に同行する 『健康』(アグレプランニング社・共同通信社) 2008 春号 P 46-49 2008年

6. 研究組織

(1)研究代表者

松本 光太郎 (MATSUMOTO KOTARO)  
名古屋大学・エコトピア科学研究所・特任講師

研究者番号：60420361